ヴェブレン『有閑階級』に関する考察

北海道大学経済学部二年
金子優香理

2015 年 5 月 15 日

ヴェブレンは『有閑階級の理論』において、正しく優雅である基準は「有閑」に則っており、ただ怠惰であったり、奢侈であったりすることではないと示している。1865 年南北戦争終了後、アメリカ資本主義は目覚ましく発展していた「金ぴか時代（Gilded Age）」において、散財する大富豪たちは有閑階級の初期段階に過ぎない。無益な暇は非難の対象であり、それはただの「みせかけ」、「必需品」である。この主張によって、無思考に豪遊する富豪家たちを批判する効果があったと言える。

しかし、ヴェブレンは、ステレオタイプの思想を固持しており普遍的な主張とは言いがたい。

「有閑階級」の根本になっている「文化はピラミッド構造になっており、有閑階級はその頂点に立っている。」という主張だが、これは正しいか疑問である。たしかに、資産という点で人々を見ればピラミッド型に分類することができ、また上流階級の文化が有閑階級に必要不可欠なものかもしれない。しかし、そのピラミッド構造は資産によって分類されたものであり、文化の優劣によってなされたものではない。よって、有閑階級は社会的秩序の頂点に立っており、社会全体を律しているとは言い難い。

また、「有閑階級」は当時のアメリカを対象としており、他の時間または他の地域においては当てはまらないことも多い。例えば、日本について考えてみる。西洋化が進んだ明治以降は「有閑階級」に該当することも多いが、江戸時代を見てみると文化は支配者と被支配者の間で共有されている。江戸時代は産業革命こそ起こっていないが、産業が発展し、加えて江戸は当時最も多くの人々が生活していた。江戸はヴィブレンの「有閑階級」の前提を満たしていると言えるのではないだろうか。しかし、江戸前期に発展した元禄文化は担い手が支配者層の武士であるにもかかわらず、庶民的な面が強く、また江戸後期の化政文化は旗本・御家人、裕福な町人が担い手だが、次第に庶民にも広まっていった。このように文化が分化するのではなく、異なる階級間で共有されることもある。

この流れは現代になるほど強くなっているだろう。なぜなら、今やインターネットの発達により情報は一瞬で地域や国を越えて共有されている。加えて、情報産業が発達することによって絶対的な文化上位にいた文学、音楽などの芸術作品や服装、行事はクラシック、古典的とみなされ、ヴェブレン当時のような圧倒的な地位は持ちえていない。そのかわり形に残らない情報が重要な価値を持ち、投資先になっている。

経済思想 小レポート ヴェブレンの有閑階級について

2015 年 5 月 28 日 01145026 中川 岳士

有閑階級という階級について、最初にこの言葉を聞いたとき、私は意味をよく理解していなかったが、意味が分かると同時に「働かずに娯楽に時間を費やす、自由奔放な階級」という印象を受けた。働いてお金を稼ぎ、そのお金で生活していく、という大部分の人民のライフスタイルとは一線を画している。彼らは、資本主義における資本家と労働者のどちらの枠にも収まらず、ただただ暇を娯楽でつぶしている。なんて非生産的な人間なのだろう、と思った。しかし、もし自分が一生遊んで暮らせるだけの財産を持っていたとしたら、おそらく労働などという徒労はしないように思う。理由は極めて単純、お金を得るための労働が必要ないからである。自分は労働者たちがお金を得るために費やす時間を、他の何かに投資して、彼らとは違う存在なのだという格付けとなるものを得たくなるのである。こういった風に考えてみて、なるほどこうして有閑階級というものが存在するのだと納得した。

有閑階級の顕示的消費についての話は特に印象的だった。当時の思想では、ヒールやコルセット・スカート・長い髪などが暇さや労働していないことのしるしとなり、有閑階級の象徴ともいえたということには驚いた。こんにちで言えば、どのようなものが有閑階級の象徴となるだろうか。真っ先にブランド物のバッグやネックレスが思い浮かんだが、これらはあくまで希少性を堅持しているのであって、暇さを示すものではない。似て非なるもののように感じる、では他に何があるか。私は、それに近いものとしてスポーツや芸術が挙げられるように思う。スポーツを例にとる。フィギュアスケートというスポーツは、費用がとてつもなくかかるため、ある程度裕福な家庭で育てられなければ続けていくことはできないと言われている。それはつまり、フィギュアスケートをやっていることそのものが、富裕層に生まれ娯楽に勤しむための多くの時間を持っている、ということを示しているように思われる。芸術を例にとった場合では、ヴァイオリニストやピアニストがその類だろうか（もっとも、スポーツにせよ芸術にせよ、賞金で食いつないでいる人間も一定数存在するので、例外はある）。ヴェブレンの時代と単純な比較はできないが、現代ではこうしたスポーツが有閑階級に近いものの象徴になるように思われる。有閑階級は、とにかくヒマを前提条件としており、時間の非生産的消費こそが、有閑そのものだと言える。

製作者本能についての話で、「人間は目標の達成を望む主体であるがゆえに、効果的な仕事に対する愛好と、無駄な努力に対する嫌悪を持つようになる」という内容があった。私はこの言葉に大いに賛同したく思った。というより、経済学部生にはこういった考えを持っている人が多いのではないか、と考える。良くも悪くも、経済学という学問の中では、効率や

合理性といった、無駄を省くことが重視されている面が多いからである。経済学を学ぶ人は最初から合理主義な人が多いし、そうでなかった人も経済学を学ぶ中で合理主義へと染まっていくように思われる。市場経済の中では、効率を重視し、数字を競うことが多いに求められている。この事実を考慮すれば、ヴェブレンの先述した言葉は、非常に重要な思想であり、私にとっても印象深いものに感じられた。

ラスキンの思想

２年　西川　泰利　６月 18 日

ラスキンにおける労働を考えてみる。彼によると労働組織は、政府主導で完全に管理された訓練学校で労働者をそだてることである。生産品と販売は政府が責任もって管理し、老若男女の全ての失業者は訓練学校で試験などを通して個人にあった再就職先に就かせることを保証する。また、賃金は毎年ごと政府によって設定された金額を支給することになっているのだ。商人の心得としては、自分が最大限利益を享受するために商売するのでなく、できる限り質の高い商品を最も必要としている場所に最低価格で提供することである。

富や生産物といったものはもっとも有用に扱うことができる場に配分されるべきものである。生産とは苦痛を伴いながらする行為ではなく、有益に消費されるもので、「生」を内包しなければならない。ここで定義される「生」は愛、歓喜、賛美といったものなのだ。

ラスキンの芸術経済論では、実利ばかり追求することを批判していた。芸術を軽視し、財貨の利用の欲求のため、労働のための労働といった低俗の欲求が蔓延する。ある芸術才能をもった人はそれを活かした職種に所属することが望ましいが、安定した生活が送れることは保証されていなく、そのため自分の活動に集中することが難しくなってモチベーションが下がったり、自分の信念を曲げて、その社会に迎合される作品をつくりだすことは不経済をもたらす。そういった状況に陥らないために訓練学校があるのだ。そこでは個人の持つ才能を否定せず、十分に発揮することができる生活環境に近づけることを目標としているのだ。他にも、できるだけ高尚な作品に触れ、洗練された技術を身につけさせる。そうすることによって、国民は彼らが作った作品によって快感を味わうことができるのである。偉大な芸術作品とういうものは保存されるべきものである。彼によれば、現在の時間軸にいる人は常に将来の世代について考える。それを踏まえて、次世代は感謝と敬意を表して前世代の仕事を受け継ぐことが望ましく、富は一世代だけで生産されるものではないし、質の悪い作品を大量に生産するよりも偉大な作品を長期にわたって保存することが重要なのである。

国家が成長するにつれて、重要産業にはギルド組織をつくる必要性がある。ギルドの役目は芸術作品を展示し、その職業が名誉で価値あるものだと人々に認識させ、同時に労働者を

管理することなのだ。

　考察

彼の思想から読み取れることはあらゆる活動に政府が介入していることがわかる。社会主義的な思想であり、労働整備に積極てきである。また、芸術文化財の保護も提言しており、常に国民が高い意識をもって生産活動に励むべきだとしている。ただ、現実にこの思想を取り入れようとすると、ハイエクの思想にもあったように官僚主義の弊害である賄賂や金の横領などの恐れもある。

若い芸術家への「期待」を根底にした芸術作品への投資とパトロンのあり方

野田 一輝　2015/06/23 提出

ラスキンの芸術論を受けて、私は若者への「期待」に重要性を感じる。その一方で芸術作品を個人のものとするよりも、公に共有した方が若い芸術家への支援になると考える。以下、若い芸術家への「期待」とパトロンのあり方について社会発展を目的に考察する。

ラスキンの芸術経済論によれば、芸術家に「完全な作品」を作らせて芸術知能を経済的に用いるべきだという。そして成長しそうな現存する若い芸術家から作品を高値で買い取ることが合理的である。若い芸術家にお金が入ることで芸術家の成長を支援でき、今後その芸術家の地位が上昇することで作品の価値が上がり、所有者の地位財としての価値も上昇することができるのだ。

私はラスキンと同様に、若い芸術家から作品を高値で買い取ることに賛成である。芸術家から高値で作品を買い取ることは「完全な作品」を要求することと同義である。「完全な作品」をこの世に多く遺すことは社会全体の利益である。また、経済的理由から優れた芸術知能を腐らせてしまうことは社会全体に対して損であるから、作品を高値で買い取る行為を通して若い芸術家に経済基盤を与えることは合理的である。

こうした思想の根底には若い芸術家への「期待」がある。若い芸術家には、将来、大成するであろうという「期待」があることから、富者は作品を高値で買い取ることができる。「期待」なしには作品に高値がつくことはない。高値がつかない作品を生み出す芸術家は淘汰されていくということから、芸術家同士の競争が促されて芸術水準の向上が期待できる。

しかし、買い取った作品を個人所有とするのは社会全体の利益から考えて合理的であるとは言えない。芸術作品を単なる地位財として所有しているだけで満足するのは社会貢献に及ばず、真に社会貢献とするには芸術作品を一般公開するべきである。若い芸術家の芸術知能を磨くには、優れた作品に出来る限り触れさせるのがよいからだ。

作品が散在している状態を是とせず、出来る限り一箇所に集中して展示することが望ましい。「完全な作品」が一箇所に集中していれば、将来に「期待」される若い芸術家への芸術的支援にもなりうる。一挙に「完全な作品」を目にすることができるからだ。例えば、大塚国際美術館（徳島県）には、世界中に散在する約 1000 点もの作品の複製が原寸大で展示されている。優れた芸術知能を涵養するには出来る限り多くの「完全な作品」に容易に触れられる環境を設けるのがよい。

以上のように、芸術家のパトロンは、「期待」できる若い芸術家から作品を高値で購入し、その作品を広く一般に公開するべきだと考える。こうして若い芸術家は芸術を続けることができ（経済的支援）、成長し続けることもできる（芸術的支援）。

ウェブレンの思想についての小レポート

経済学部２年　01145113 一杉勇輝

授業を聞いてまず感じたのは有閑階級に対して一種のあこがれを抱いたが、なりたいとは思わなかったということである。私は有閑階級ではなく、労働者階級である。仕事をしなくてよく、自己顕示が主な仕事といえる有閑階級へ労働者階級で憧れを抱く人は多いだろう。では、なぜ私は有閑階級になりたくないかというと、大学などで学ぶのであれば実学を学びたいし、それを生かして社会で活躍したいと感じたからである。また、社会で活躍することがトロフィーの獲得につながるのではないかとも考えられる。

しかし、有閑階級の思想に妥当性は感じた。顕示的であること、保守的であることなどは有閑階級の特長を鑑みれば納得がいく。有閑階級にとって自己を顕示することは非常に大切である。自己顕示は自分たちの優位性を示すことにつながるからだ。プライドや立場といった社会的な地位によって、有閑階級の人々は日常が左右されてしまう。そのため、有閑階級の社会において優位性を持つことは重要であり、優位性を持つために競争が発生する。この競争の過程を経て有閑階級は発展をとげているのではないだろうか。また、衣服などが目立つように力を入れるということも自己顕示につながるだろう。さらにいえば、労働をしないということはお金があることの顕示であり、それは余裕があることを間接的に顕示しているといえる。このように有閑階級は様々な面で自己顕示をしているのである。保守的であるということも妥当だ。有閑階級は総じて現状に満足していることが多いだろう。現状維持をすることで満足した生活を送ることができるので、変化を求めるリスクは必要ないのである。変化を求め、革命が起きて労働者階級の蜂起などが起きてしまうのを防ぐためという側面もあるだろう。

有閑階級は有閑階級の中で自己顕示をするだけでなく、労働者階級へも積極的に優位性を顕示しようと努める。労働者階級に比べ自分たちが優れていること、余裕があることを示し、優位であることを常に意識させるのである。社会全体に一種の身分格差のような意識が浸透することによって有閑階級は守られ、過去に有閑階級中心の社会が成立していたのではないだろうか。

現代社会において有閑階級のような生活を送ることができるのは極一部である。ほとんどの人は労働をしなくてはならないし、何らかの変化を求めて努力し続けている。私は、この努力し続ける姿勢には、有閑階級であることよりも価値があるように思える。有閑階級は労働者なしでは成立しない。労働者にこそ本当の価値があると私は考える。有閑階級が労働者への配慮を忘れず、互いを補いながら成り立つことが理想的だろう。

ラスキンの経済・社会観念

経済学部２年　村岡　秀吾

ジョン・ラスキンは 19 世紀イギリスで活躍した経済思想家である。彼はこれまでの授業で取り扱ってきた経済思想家と異なり、美術評論家としても名をはせており、彼の経済思想には芸術的思想が深く関係しているといえる。

彼の思想を授業で取り扱った『この最後の者にも』『芸術経済論』『政治経済要義論―塵のたまもの』から考える。彼は経済学の目的を「生命のみならず、健全にして、幸福なる生命の持続にある」として、人類の増殖に重きを置いた。そして富と価値を「生命を維持するための物の力」、「物の生命賦与力」と捉えている。彼の経済観念の根底には生命という概念がある。

ラスキンは経済活動の典型例である取引についてこう述べている。

「取引においては、「忠実」でなければならない。利潤ではなく、たんなる「報酬」を求めるのでなければならない。」

個人の利益だけを目的にして行われる取引活動を否定しているともとれる。彼は「販売」が敵同士の交易であるのに対し、真の「商売」は友好関係にある者たちの間で行われると説く。確かに富は社会全体の所有物という考えもあるが、経済市場が親密な関係にある者同士で回っているという考え方はこの競争主義の社会において受け入れられるものではないだろう。

また彼は社会思想家として「統治」に関しても強く主張している。彼は政治・経済の統治を説く際に、「賢」という用語をよく用いていることが分かる。「経済とは、公私を問わず、労働の賢明なる管理のことである。」とあるように、経済は「賢者」による管理だという。彼

は「賢者」による統治を求めていた。ここでいう賢者とは単に頭の切れる者を指すのではなく、同時に勇敢で親切である者でなければならない。なぜなら統治者は合理的に経済を動かすことに加えて、道徳律に沿った慈悲あふれる社会であることを目指さねばならないからである。人々に「恵み（カリス)」を与える寛大な者こそ、真に統治者にふさわしい人間であるという。

現在の資本主義社会を市場メカニズムが動かしているのに対し、ラスキンの説く統治構図は一部の支配者層が社会を統制するという社会・共産主義に近いと感じる。実際にラスキンの思想は、芸術界はもちろんのこと、モリスやトルストイなど後の社会主義につながることになった。ラスキンを師と仰ぐ彼らの思想は日本にも強い影響を及ぼし、無政府主義や社会主義が国内で興る結果となった。

日本では弾圧され失敗に終わったが、社会主義革命のもと世界では社会主義国家が誕生した。こうしてラスキンの望んだ統治形態が達成されたといえるだろう。しかし実際に歴史をさかのぼると、国民の幸福を達成できた国家は決して多くはない。賢明さと寛大さを兼ね備える人間が「支配者」の理想像だったが、実際に多くの独裁国家で政治を執ったのは理想像とは程遠い人間達であった。確かに人民の扇動・革命・戦争に長けた智謀であったかもしれないが、統治に関して愚鈍で、自己中心的であったことだろう。そうしたものによって「不活発な、よく統治されていない社会」になり、その下に服従する国民は困窮した生活を送ったのである。

参考文献

橋本努「ジョン・ラスキン『この最後の者にも』『芸術経済論』『政治経済要義論―塵のたまもの』」
<http://www.econ.hokudai.ac.jp/~hasimoto/Japanese%20Index%20Lectures%20and%20Seminars.htm>

「有害な聖人―社会主義者モリス」（2005）
http://www.geocities.jp/mickindex/morris/morris_other_intro.html

経済思想レポート　　　７月１３日

北島　壮一郎

　ラスキンの「芸術経済論」について考えると、芸術作品、芸術家、芸術そのものについて考えさせられる。まず、芸術家はつねに発見され続けるものであり、常に芸術作品は生み出されるべきものであるとラスキンは述べている。私も常に芸術家は生み出され続けるべき

であると考えている。しかし、現状としては現存している芸術は評価されることは少なく、死後に評価されることが多い。そのためになかなか芸術家が生まれない、もしくは優れた独創性や感性をもつ芸術家がつぶされてしまっているという状況になってしまっている。私はこのような状況に陥ってしまう原因として芸術を鑑賞する側の問題もあると思う。現存する芸術家の作品を正当に評価できないということである。これは鑑賞する側の固定観念、すなわち同世代、それより若い世代に偉大な作品を作れるはずがないというものも含まれてしまっていると思う。もしくは、芸術作品が一部の富者しか触れることができなく、本当に芸術を理解できるものに見られていないかのどちらかである。それぞれに解決策はある。お金を持っているものに対しては優れた芸術作品に触れさせる機会を増やし、本当にすぐれた作品とはどのようなものかを理解させる。富者にとって高価な芸術作品はステータスでしかないのだから、値段にとらわれずに芸術を理解させるのは実に効果的である。また、お金をもっていなくても芸術に触れさせる方法としては芸術作品の展覧会を国が開くことである。国が優れた若者芸術家の作品を買い取り、それを展覧会に出展する。これには２つのメリットがある。１つには、先にも述べたようにお金を持っていないものにも芸術に触れる機会をふやせるということである。単に芸術作品を理解するものが増えるだけでも国は豊かになるしいいことではある。２つめのメリットは若者の芸術作品が正当に評価されるようになることである。さらには若者に生活に苦労しないだけの報酬が入り、芸術作品を生み出すうえでの資金になったり、インセンティブになったりすることである。このようにすることで芸術は守られると考える。芸術を守ることは目に見えなくても必ずメリットはある。若い芸術家をいかにして守り、芸術を盛んにしていくかが重要なことであるように感じる。

訓練学校の是非をジョン・ラスキンの思想から考える

経済学部　2 年次
氏名　熊川湧貴

今回のレポートでは「現代において労働者のための訓練学校を作るべきか否か」という問題について自分なりに考えようと思う。

そもそも訓練学校とは何かというと、現実にあるわけではなくジョン・ラスキンの思想上のもので、[1]「いかなる男女、少年少女も、職を失った場合には最寄りの政府の学校に収容し、試験のうえかれらに適している仕事につかせ、毎年改定する一定率の賃金を支払う」というように、仕事が下手で解雇された人々を再就職させるために作られる学校のことであ

る。ラスキンが訓練学校を作ろうと考えた背景には、人々が失職するということはその人がその職に適していなかったことを表し、ほかに適している職業が見つかればその人の労働の効率も上がり経済全体も潤うという先見がある。そして、[2]「この試験的訓練学校に次いで必要なことは、彼らに何かやさしい安定した職業を与えることで、これがまたすこぶる重要なことなのである。」[3]「われわれが主に必要とすることは、十分な、安定した職業を与えることである。多くの青年画家が先を争って取ろうとするような巨額の懸賞金を提供することではなくして、彼らすべてにたいして、適当な生活の資を与え、その有する能力を拒絶したり、難儀することもなくして、それを十分に発揮する機会を与えようというのである。」といった画家の例のように、もし素晴らしい才能があったとしても生活できなければ、その才能を発揮するどころか自分の眠れる才能を認知しないまま一生を終えてしまうかもしれないので、国が生活の安定を保証し訓練学校でその人その人の才能を発掘してあげよう、というのである。

結論として、自分は訓練学校を建てることに反対だ。なぜこのような結論に至ったのか理由を述べる。

第一に、人々は「やりたい仕事」と「適している仕事」は違う人が多いのではないか、ということである。例えば、もし A という人が、物を作ることに興味を持ち工業高等学校に入学して工業の専門技術を学び工場に就職した、そして、職場で上司にたまたま目をつけられ辞職させられたケースを考えたとき、A としては前の職場では人間関係が悪かっただけなのでスキルを生かすためにも新しい工場に転職しようと考えるだろう。しかし、国が訓練学校を設立していると、失職者は訓練学校に集められ、強制的に試験を受けさせられ、機械的にその人に合っているとされている職業に就かせられるわけで、もし A がパティシエに向いていると判断されてしまったら、今まで A の学んできたことは無に帰しまた一からパティシエの技術を取得しなくてはならなくなる。万が一 A が工業よりパティシエに向いていたとしても、技術を取得するまでの時間と A の仕事に対するモチベーションを考えると工場で働く方が良いのではないかと思わざるを得ない。「適している仕事」だとしても「やりたい仕事」とは言えないからだ。

第二に、訓練学校を建てるときに莫大なお金が必要になる、ということである。職業の適性試験を行うならば、各職業で使うものが必要になり、それは高価な機械なども含まれると予想される。しかも失職者は全国各地で出るので全国に学校を作る必要がある。そうなるとどれだけお金が必要になるかは計り知れない。尚且つそのお金はどこから出るのかというと十中八九税金だろう。経営が傾き仕方なく仕事の効率が悪い従業員を切った結果、企業に課される税金が増えるのは皮肉でしかない。

これらの理由も踏まえたうえで自分の考えとしては、国は失職者の訓練学校を建てるの

ではなく、義務教育期間中の小・中学校で自分がどのような職業に向いているか考えさせる場を多く設けることが失職者を減らす一番の打開策ではないだろうかと考える。確かにこの時期は自我の芽生え始めのころで自分の将来を考える子供などほぼいないだろう。だからこそ、生徒を受け持っている教師が積極的に将来について子供たちと話したり、学校の行事で企業インターンシップなどを充実させたりして、子供たちに自分の将来について興味を持たせるべきだと思う。

未来の社会の担い手となる子供たちが将来後悔なく職に就けるよう、学校の教育の充実が急務である。

参考資料

[1]：講義レジュメ　ジョン・ラスキン　『この最後の者にも』　1p
[2]：講義レジュメ　ジョン・ラスキン　『芸術経済論』　5p
[3]：講義レジュメ　ジョン・ラスキン　『芸術経済論』　5p

ラスキン

北海道大学２年経済学部佐野裕典７月１２日

ラスキンは倫理経済の条件として、「賃金の平等」を挙げている。ラスキンの目標とする賃金の平等は、一定の賃金が支払われる代わりに、能力がある職人のみが雇われる制度である。賃金の平等によってラスキンは能力を雇用の条件として、能力のない労働者の雇用を排除している。反対に、能力のない労働者が、能力のあるものの半分の賃金で雇用され、結果、能力のある者が半分の賃金で雇用されてしまう仕組みを持つ資本主義経済を否定している。このことから、ラスキンは能力のある者、精神が立派な人間が増えることが、最も利益があり富が増大すると述べている。

ラスキンによると、よい統治は能力が十分に発揮された社会であるという。一見賃金の平等からして社会主義的な感じがするが、能力あるもののみが報酬を受け取れるから不平等な社会である。有用なものなものは有用に用いることができるもの、つまり能力のある者へ分配するべきであるとも述べている。優越を重視して言うラスキンは、優越者の支配を強調し自由経済を否定している。

経済学の任務は生命を導き、実質的価値を教えることであり、虚学の反対にあたる。

ラスキンは芸術の経済に対する意味を述べている。国民が実利追求のみをすると、これまで芸術に費やされてきた国民のエネルギーは浪費され不経済になる。また、貨幣欲が強くなってしまい蓄積のための蓄積、労働のための労働のような低級の欲情が強くなってしまっ

ても不経済になる。芸術の保護のためにラスキンは訓練学校の設立を提案している。強い芸術的才能のあるものは、将来は芸術家になるが、多くの場合は生活のために少年の精力は消費され、精神はひねくれ天分がゆがめられてしまう。そのようなことがないようにするためには、やさしい安定した職を与えることだという。安定した職業の例として公共事業を提案している。公共事業にも条件を与えていて、自由度を与えるべきだと主張している。「多種多様の異なったデザインの柱頭飾を自由に刻ませたほうが、同一デザイン柱頭飾を彫刻させるより約三割安く出来上がったという」という例があるように、公共事業に自由度を与えたほうが、精神活動が活発になり、安価に仕上がるという。また、芸術の保存に関して、芸術の完成品も完全な作品が経済的であって、安物は不経済的であるとして完全な作品を重視し、保存するべきだと述べている。そして、完全な芸術品は世代間で継承することが重要であるとしている。その一方で、富者階級が「人格」を高めるために絵を購入することは無駄であるとし、代わりに支払う金を現在生きる画家に投資するべきだと述べている。芸術の高貴な事業は、商人が公立会議所に絵画を飾り承認の品性を上げることだとしている。

ラスキンは経済学の目的を「最高水準における生の増殖」であるとしている。また、受容能力と固有価値が相会するところに有効価値が生産され、この二つがないと不経済であるとしている。

ラスキンの考えに対して自分の意見を述べる。私の考えは経済第一主義が大きいので、ラスキンの最高水準の生の増殖が最適な経済発展の手段であるなら賛成の立場である。ラスキンによると才能あるものが才能ない者と同じ価格の賃金で雇われないようにするための賃金の平等を主張した。果たしてこの制度が経済発展の最適な手段なのだろうか。経済の発展の最適な条件はレッセフェールによる自由競争が条件であると考える。労働者の働きぶりに対して賃金を変化させることで、効率、仕事量を改善し利益を上げようとする行動が経済を発展させる。そして、学習効果からわかるように、たとえ才能がないものであっても経験により効率や仕事量を改善することができる。故に、経済をより良いものにするには経験を多く積み、効率性、仕事量を改善させた労働者が重要なのである。才能のような運に恵まれたものは賃金平等によって保護することはかえって才能以上のものを引き出せないようにする障害にすぎないのである。最適と考えるのは、才能のない者も含め最低賃金を定め、(この水準では何とか暮らしができる水準)社会全体の向上心を絶えずあおることであり、このことが経済発展の条件だと考える。

経済学部　佐藤　美杜

まず、ジョン・ラスキンの「労働の組織についての政治信条」ついて、ラスキンは失業し

た人々に試験を受けさせた上で適した職業に就かせ、一定率の賃金を支払うべきだと考えているが、私はこの意見に賛成である。失業して路頭に迷った人々は、窃盗などの犯罪を起こしてしまうかもしれない。そのような人々も安定した収入があれば、盗みなどしなくて済むだろう。また、その人に適した職業に就くことができれば、その仕事を辞めてしまう可能性も低くなる。人々の収入を安定させられる上、犯罪の取り締まりにかかる費用を節約することもできるだろう。しかし、老齢でかつ貧困なものに安楽と家庭が支給され、労働者は村から養老金を受け取り、公費によって埋葬されるべきだという考えには反対である。これ程手厚い政策となると、人々が払う税金も高額になるだろう。さらに日本のように少子高齢化社会の場合、現役一人あたりの負担はどんどん重くなっていってしまう。よって、この政策は行うべきではないと思う。

「芸術の保存と価値」について、ラスキンは「この世における最善の物や財産はすべて、一時代だけで生産されるものではない。」と考えているが、この考えに賛成である。たとえば日本の伝統文化や、過去の記録は、何世紀にもわたって受け継がれ今に至る。その歴史や文化は日本人の財産と考えられているが、その文化のなかには、生まれた当初は後世で大切な財産として扱われていると考えられていなかったものもあるだろう。後世に価値あるものだと認識される文化もある。

「賢者による統治」について、ラスキンは「自分自身が賢明になってゆくことを立証されるにつれて、いっそう大きな発言権をもつべきである。」と考えるが、私はこの考えに反対である。もしラスキンの言うように年をとった人が若者より多くの投票権を持つとしたら、革新的な若者の意見が政治に反映されず、政治はいつまでたっても保守的になってしまうと思う。それでは、社会の発展は見込めない。また、年上の人の方が年下の人より賢明とは限らない。よって、政治については、日本のように平等に一人一票の制度を採用すべきである。

「賢明な生き方」について、ラスキンは金銭の儲け手はその使い手でもあるべきで、死ぬ前にほとんど全てを消費するべきだと考えているが、私はこの考えには反対である。人々は、すべて自分で使う為にお金を稼いでいるわけではないと思う。家族がいる人々は、その子孫に財産を残してあげたいと考えるだろう。死ぬ前にすべて自分で消費しようと考えたら、有益な使い方ができないかもしれない。よって、死ぬ前に自分の稼いだお金を全て使ってしまうというのは、賢明とは言えないと思う。

水森朱里　2015/06/16

ジョン・ラスキンについて

「賃金の平等」のところで、「じょうずな職人は雇われるがへたな職人は雇われない」のが自然で正当な制度であるとラスキンは言っているが、雇われなかった職人はどうするのであろうか？ラスキンの考えでは、政府の費用で無職のものを訓練学校に入れ、適正テストを受けさせて、商売を習わせ、適切な仕事に就かせて、一定率の賃金を支払うのがよいとされている。しかし、政府の費用というのは、じょうずな職人から支払われた税金なのであり、無職のものは学校へ行って賃金をもらう制度では、じょうずな職人たちの不満が爆発する、不安定な状態となると思う。

「『生』の産出としての労働」のところでは、殺人の対極に育児がおかれている。殺人を行えば裁判にかけられ、刑務所に入るか、あるいは死刑などの罰が与えられる。育児が殺人の反対ならば、政府の制度として、育児を行った者に対する何らかの報酬があってもいいと思う。今の日本は、少子化が叫ばれて久しいものの、現在の出生率を見れば、育児を積極的に行うよう鼓舞する有効な政策は行われていない。ラスキンは「育児が賞賛されるべきことである」と言っているが、この意識が今の日本には足りないと思う。子育て支援制度や、子供手当てのような、制度やお金の政策だけでなく、政府は国民に、子育てを賞賛する意識を持ってもらえるようにアプローチするのもよいと思う。

ラスキンの思想では、「高潔」、「りっぱな精神」、「愛」、「幸福」のような、精神にかかわる言葉が多く用いられているが、これらの定義は曖昧で、人によって大きく違うのではないかと思う。これらの精神を学校教育で行い、国民に共通の認識を持つようにすれば、それは思想の強制、悪く言えば洗脳、ということにもなり得るため、国民全員を高潔な人間にしようというのは現実的に不可能ではないかと思う。

「安定した職業の提供」に関して、各々に適した職業に就いても、それが社会の欲する配分と同じにはならないと思う。たとえば、社会が、画家１人、農家９人を必要としていて、適職は画家５人、農家５人であった場合、適職が画家である４人は、農家にならなければならず、自分の能力を発揮できない。もし全員が適職につけば、社会は成り立たなくなる。

投票権において、「二十歳で一票」「三十歳では二票、四十歳では四票、五十歳では十票をもつべき」と書かれているが、これではうまくいかないと思う。年をとればとるほど賢明になるとは思えないからだ。若者も年をとったものも自分にとって魅力的な政策に投票するのが一般的だと思う。お年よりはこの先の人生が短いため、後のことをあまり考えず、次世代に借金を残し、老人に対する福祉にお金をつぎ込むような政策を支持するだろう。これでは、ラスキンの言う「生」を産出し続けることはできない。

「ハイエク」の思想に触れて　　　01145031 針谷　梢吾　2015 年 6 月 15 日

ハイエクの思想は、自分の常日頃考えていることとは異なるようだ。対立する考えを知りえたことで、更に自らの考えに深みをもたらすことができたと思う。彼は、市場を自由に放任することに重きを置いており、この点において自分はある程度は同じ考えである。これから、ハイエクの主張において共感できた部分とそうでない部分を述べていく。

第一に、競争についてである。もし仮に、「完全競争」が行われたとすれば、これ以降は技術革新や競争が行われずに固定化したものになってしまい、その市場よりも優れている可能性のある市場が形成されなくなってしまう。競争は、いかに人々のニーズに近づき、満たすため試行錯誤を繰り返し、より良い物を生み出していくか、という過程にこそ価値をおくべきものであると考える。このトライ・アンドエラーをし続けた結果、他企業が不在となってしまった状況が、所謂独占であるが、自分がハイエクに違和感を覚えるのは、この独占企業を優れたものとする点である。独占市場では、市場均衡価格が存在せず、その企業の一存によって価格が設定されてしまい、代替品がなければ消費者はたとえ高価格でも購入せざるを得ない。この点においては、独占企業が最も優れた生産する企業として認められるものであるとは一概に言えないと考える。

第二に、貨幣発行についてもハイエクは自由を一貫として主張している。貨幣発行を非国有化し、どのような貨幣の供給量が適しているかは市場の発展段階を通じて特定の機関が発行する。多様な貨幣を流通させることで、人々のニーズに適した貨幣が他の不適な貨幣を淘汰していく。では、もし貨幣が 1 種類のみに統一され、他の貨幣は淘汰されてしまったとしたら、どうなるだろう。先述のように、この状態は貨幣の独占状態であるが、この場合には、輸出輸入業を営む企業にとっては大きな痛手どころではない。海外に投資を行う投資家さえも、自己の投資を客体化できなくなってしまい、結果として世界経済全体に不利益をもたらしてしまう。例えば、バブル期の A 国と不況の B 国を考える。もし貨幣が統一されていた場合、金利の上げ下げどちらを行っても、片方の国しか救うことができないのである。この事例から分かるように、極端な貨幣淘汰はすべきではない。ハイエクの思想はこの点においては不適と考える。

ハイエクにおいて特有であるのが、かの著名なソクラテスのような、人間の「無知」に焦点を当てている点である。個として無知である人々が集えば、烏合の衆が出来上がると考えられるが、実はそうではない。無知で無力な人々が集まるからこそ、市場秩序を形成し、市場が育ち、自由な社会が作られる。答えのない状態から、これからの文明を形成していく上で道徳や倫理規範を身につけていく。このプロセスが無知であるために自生し、人々を自由に、そして優れたものにしていくのである。

経済思想小レポート　ハイエク

北海道大学経済学部 2 年
01145117　村上美帆
2015/6/16

まず、講義の前にかけていたハイエクとケインズの論争をラップバトルで表現している動画が最高だった。センスは抜群だし、発想もかなり良かった。そのラップのなかで、感動した部分があった。失業者をどう減らしていくかというテーマでのときに、ハイエクが歌った、”Jobs are a means, not the ends in themselves”というラインだ。これはよく考えれば当たり前のことだが、大学で経済学を学び始めて約二か月たった私は、経済をつくる労働力を、ミクロ経済学の考え方に代表するように、また、ケインズのように機械的なものとしてとらえがちであったからだ。

この素敵なラインは、講義の中で私が感動した、人間の評価は市場の価値だけでは決まらないという考え方と、経済の前に人間の生活があるという点で共通している。こう考えることで私もだいぶ生きやすくなるかもしれない。ハイエクが、机上の経済学で終わらず、実践的な経済学を唱えているということがいえるのは、変化し続けている人間の生活から経済が変化していくことを大きく取り上げて、理論に取り入れていったからなのだろう。

このように、時に私を感動させたハイエクの考え方は私にとってわかりにくかった。’合理的手段’や’完全競争’の考え方を非現実的と否定したり、保守主義を評価したりするからである。ハイエクの考え方は、新自由主義として括られているが、自由をただ追求しているわけではなく、市場成長のための国家介入を認めている。このことだけを考えると、リベラリズムに考え方が似ていると感じた。相違点は、慣習に関する考え方と経済に重きを置いているかだと自分なりに理解した。リベラリアンは、合理的でなければ、慣習や現在の秩序を壊してもいいと考え、また、政治活動を大事にするがハイエクはそうはしないのだ。

講義の中で最も考えさせられたことは、相続税に関することである。ハイエクの相続税に関する考え方は、前回の講義で取り上げられたピケティの考え方とは大きく違った。私は、格差をなくす方法として、ピケティの相続税率を上げるという方法は素晴らしいと思っていたのだが、このままだとハイエクの言うように、文化を殺してしまっていたかもしれない。文化が発展しなくなるとどうなってしまうのか、今の私には想像がつかない。ただ、いろいろな文化に触れてわくわくするのが好きな私は文化に発展していてほしいと思う。もしかしたら文化の価値が変わらないことに誰も気が付かないかもしれないとも思う。このことに関して自分なりに解を出すには、さらなる研究が必要だ。

参考資料
Fight of the Century: Keynes vs. Hayek Round Two lyrics
http://genius.com/John-papola-fight-of-the-century-keynes-vs-hayek-round-two-lyrics

社会主義経済計算論争の再興可能性
経済学部 2 年　学生番号 01140014
金川聖也

19 世紀末に生じ、長らく経済化における重大な関心事であり続けた社会主義経済計算論争において、ハイエクはオーストリア学派の旗手としてミーゼスに続いて社会主義陣営に対し論陣を張った。この論争におけるハイエクの主張は、社会主義計画経済ではあまりにも多くの情報を中央当局に集める必要があり、しかしそれは簡単に手に入るものではなく、また膨大な方程式を解かなくてはいけないという点で実現不可能であるというものであった。またハイエクは企業のデータなどの収集可能な形式知と区別して、人のカンやノウハウといった、分散的で収集不可能な暗黙知についても触れており、こうした暗黙知が収集不可能である以上、社会主義計画経済が前提とする中央当局による情報の完全把握は不可能であると述べている。これらハイエクの主張はもっともであり、完全情報の前提が達成され得ない以上、社会主義計画経済では不完全な情報を元にした計算によって財の配分が行われることになり、結果的に市場メカニズムにより達成される効率よりも下回った効率しか得ることができない。事実、社会主義体制下のハンガリーで行われた、コンピュータの計算による計画経済は完全なる失敗に終わった。

上記のように、確かにハイエクの主張はもっともであり、ハンガリーの計画経済失敗やソ連の崩壊など、歴史的にもその正しさを証明するかのような出来事は多々存在している。社会主義経済が資本主義経済に劣っているというのは、現在においては一般共通了解であると言えるだろう。

しかし近年、理論的には正しいながらも、実現に難のあった社会主義計画経済は、主に IT 技術の進歩によって、再びその息を吹き返す機会を得ようとしているのではないだろうか。現代社会において、急速なコンピュータの性能向上とインターネットの普及は膨大な情報の収集および計算を可能にし、ハイエクが不可能だと論じた暗黙知の収集へは、ビッグデータがその道を開いている。ランゲの主張した市場社会経済の可能性への反論としてハイエクが述べた、民衆の意識的・無意識的な意思収集の不可能性についても、同じくインターネ

ットという双方向のネットワークやビッグデータが解決の方法を提供している。このように社会主義経済計算論争が盛んであった時代においては不可能であったことが、現代においては着々とその実現可能性を高めているのである。そうであれば、この論争において社会主義陣営への主な反論であった完全情報の前提の不可能性を見直す必要は大いに存在すると言える。現代において非常に高度化した IT 技術を背景に、再び社会主義経済の擁護者が経済計算論争を起こすという可能性は決してゼロではないだろう。

社会主義経済はハイエクらによって一度は瀕死に追い込まれ、ソ連の崩壊を持って資本主義との優劣が完全に定まったように思える。今、もし、外部不経済や不完全情報などの欠陥を多く有しながらも、唯一ましな体制として世界を席巻している資本主義経済に対して、再び社会主義経済が日の目を見ることができるとすれば、それは IT 技術による完全情報の前提の可能性を示すことによってであろう。「21 世紀の資本」でピケティが示したように、今後ますます格差が拡大していくと予想される中で、社会主義経済は非常に多くの失敗を経てなお、科学の力を借りて多くの人間に平等の夢を与えることになるのではないだろうか。